

Title	歴史的都市図絵から観た都市機能と文化：12-20世紀におけるドイツ・パイロイト図絵から：人文地理学会2009年大会発表論題・配布資料
Author(s)	川西, 孝男
Citation	(2009)
Issue Date	2009-11-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/156066">http://hdl.handle.net/2433/156066</a>
Right	This is not the published version. Please cite only the published version. この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認ご利用ください。
Type	Presentation
Textversion	author

# 109 歴史的都市図絵から観た都市機能と文化

## 100001 —12～20 世紀におけるドイツ・バイロイト図絵から—

### City's function and culture at the view of transition on historical Map and Drawing

#### —Landkarte at Bayreuth in Germany from 12th until 20th Century—

川西孝男 (在ドイツ・オーバーフランケン歴史協会員, 京都大学・院研究生)

KAWANISHI Takao (Historischer Verein für Oberfranken e. V. in Deutschland, Graduate Researcher of Kyoto University)

キーワード： 都市図絵, バイロイト, ドイツ, カルトグラーフ

Keywords： Landkarte, Bayreuth, Germany, Kartograf(Kartograph, Cartographer)

#### I はじめに

写真や航空撮影技術のなかった時代において歴史的都市図絵は、その都市や地域の貴重な歴史史料であった。それは製作依頼者の意図、そして何よりも製作者の製図能力に大きく委ねられており、今日における製図や写真図以上の情報を持つことがある。歴史学においても「視覚的な」都市図絵が、文献史料を補強するほか、図絵自体が新しい視点や学説をもたらすなどその役割は大きい。

本論はドイツ・バイロイトにおける12世紀から20世紀の都市図絵から観た都市機能や文化の変遷に関して、現地のオーバーフランケン歴史協会、バイロイト市公文書館および博物館、バイロイト大学の提供史料や現地踏査に基づいて考察したものである。

#### II 12～16世紀のバイロイト —都市の創成期—

ドイツ東部に位置するバイロイトは、中世ドイツの東方移民の流れを受けて12世紀後半に開拓、建設されたといわれる。当時領主権を収めていたバンベルク司教によってフランケン地方の東部開拓が進められ、当地から東方約50キロの、マイン川の水源地でもあったこの地に開拓民が定住を始めた。1194年にバイエルン人開拓地が置かれたとの司教文書が出され、これが市の始まりとされた。やがて隣国ボヘミアとの交通の要衝として都市機能を有するようになるが、このドイツ辺境の一都市が転機を迎えたのは400年を経た後のこととなる。

#### III 17世紀 —辺境伯宮廷都市と30年戦争—

17世紀初頭、バイロイトには辺境伯の宮廷が置かれ、東部国境防備のため軍隊が駐留することになる。図1は当時のバイロイトの都市図絵であるが、クルムバッハの山城か

ら辺境伯宮廷が平地のバイロイトに移転している。これは火砲の威力向上などによって、山城に宮廷を置く利点がなくなったことなどによる。しかしながら、バイロイトは30年戦争に巻き込まれて都市と宮廷は壊滅状態に陥った。このため、戦後に伯位を継承したエルンスト辺境伯は図2のように都市周辺の防塁そして城や建物の外壁を補強し、都市を要塞化した。さらに後継のゲオルク・ヴィルヘルム辺境伯は宮廷都市近郊に海戦演習をも見据えた軍事都市ザンクト・ゲオルゲンを建設し、ルイ14世率いる当時ヨーロッパ最強のフランス軍の侵攻に備えた。

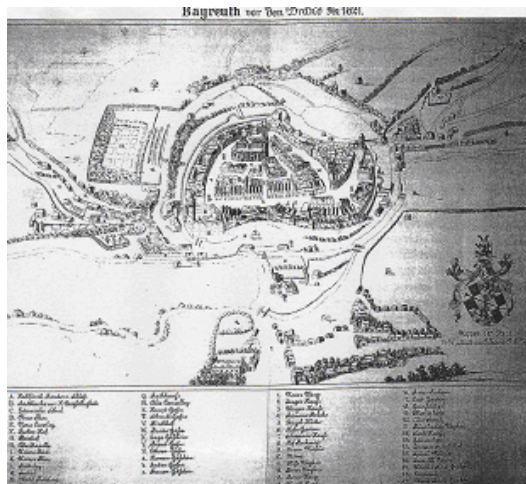


図1. 1621年当時の図絵



図2. 1686年当時の図絵

#### IV 18世紀 一領邦絶対主義と「都市図絵」の全盛一

18世紀に入るとパイロイトは辺境伯による領邦絶対主義の全盛期に入る。図3のように天使のモチーフやカルトゥーシュといったバロック装飾が都市図絵に施され、都市防衛といった軍事的要素よりも、経済や文化などの都市の繁栄が重視されている。当時の都市図絵は統治者にとってまさに「顔」といえ、領邦のイメージを形成する重要な役割をもち、領邦君主は威信を示すため、製作に積極的に助言した。また、当時の銅版画技術は精緻を極めており、都市図絵の芸術性は高く、高価であった。

この高度な技術を持つ都市図絵の製作者は「カルトグラーフ Kartograf」と呼ばれた。彼らは諸国の大学やアカデミーで製図や測量は勿論、数学や天文学、占星術、美術そして数カ国の語学を修め、ヨーロッパあるいは世界各地の都市図絵を作成し、また従軍測量技師として戦地地図の作成にかかわるといった経験を積み、都市や王侯に雇われた。さらに彼らは君主の参謀として助言し、君侯の子弟の家庭教師をも兼任するといった高度な能力を有していた。



図3. 1720年当時の図絵

この一方、18世紀のヨーロッパでは製図印刷工房による都市図絵の独占、寡占化が進展し、カルトグラーフのような製図修練者がしだいに減少した。

市場寡占化の動きはドイツにおいても顕著であり、パイロイト近隣のニュルンベルクに拠点を置くホームナー族の工房が、世界地図から都市図といった製図を一手に引き受け、ヨーロッパ各地に進出したように、分業と工程管理で量産を可能にし、その販路を広げていた。

これに対し、18世紀半ばのパイロイト辺境伯フリードリヒはカルトグラーフを雇い入れ、図4にみられる独自の領邦図を作らせた。このカルトグラーフたるパイロイト宮廷首席技師リーディガーJ.A. Riediger(1680-1756)は、こ

の領邦全図(リーディガー・プラン Riediger-Plan)に様々な趣向をこらしている。このようにヨーロッパにおいて18世紀が製図の全盛期であると同時に、大量生産に向けた移行期でもあった。



図4. 1745年当時の図絵(リーディガー・プラン)

#### V 19~20世紀 一普及化そして手工図絵の終焉一

19世紀に入ると領邦絶対主義の終わりとともに市民階級の時代が訪れ、図絵もまた一変し、これまでの君主の威信を賭けた荘重性やオリジナリティを持つものは減り、住居家屋、市や商業文化施設の所在を正確に示すといった今日に通じる有用な平面地図の様相を呈するようになる。また、図5にみられるようにパイロイトにおいても市内図が印刷技術の向上による大量生産によって次第に普及した。

一方で、手工による都市図絵は20世紀に入ると写真技術、航空撮影技術の進歩で次第に市場を失った。さらにデジタル化の推進などで、現在は芸術作品といった希少価値にとどまるようになった。

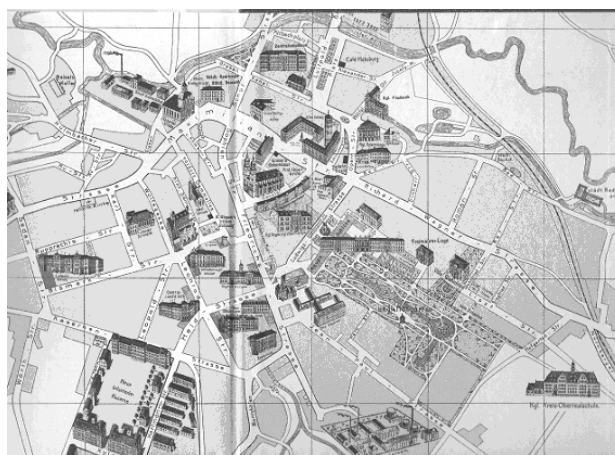


図5. 1900年当時の図絵(普及版)

(史料提供: オーバーフランケン歴史協会)